

令和3年度 学力向上指導改善プラン

志手原小学校長 植木 俊也

学校教育目標		自ら学ぶ意欲と方法を身に付けた心豊かな志手原っ子の育成				
推進主体		学力向上委員会				
学力に関する前年度の状況・経年の課題等						
学 力 の 状 況	これまでの全国学力・学習状況調査結果の状況(教科に関する質問紙調査の結果も含む)	○学校図書との連携を図り、調べ学習を中心に学校図書館を活用した学習に取り組むことができた。また、調べ学習の中で「調べ力」表現する力を養うことができた。読書量も増えてきている。 ○一昨年度での学力調査では、「話す・聞く」言語」の領域で課題がみられる。 ○話すスピードや声の大きさ、抑揚など「伝えるための話し方」をさらに身に付けられるようしていかなければならない。 ○多くの児童が学年別配当表にある漢字を概ね正しく読み書きできるようになっている。 ○基礎的な計算力がついてきている。	○読む・書くなどの言語事項を中心とした基礎基本の定着 ○読解力の向上 ○読書活動の充実 ○話す聞く力の向上 ○ICT機器を活用し、子どもたちのつながりを大切にしながら授業づくり ○対話的な学びの場を位置づけた授業づくり	○実生活の様々な場面に応じて、論理的に書いたり、話したりする機会を多く設け、習熟を図ることが出来る。 ○登場人物の相互関係や心情・場面についての変化を読み取ったり、文章を読んで考えたことについて、交流したりする学習活動を学年の発達段階に応じて取り入れていく。 ○学校図書と連携し、学習内容だけにどめず調べ学習や多読につなげ、学校図書館を活用した学習を進める。 ○対話的な学びの場を取り入れた授業構成を定着させる。(ICTの活用含む) ○めあてで、自力解決の方法・ふりかえり等のあるノート指導を行う ○ひょうごつまずきポイント指導事例集等を活用する	○ICTを活用した授業づくりをすすめていく中で、自分の思いや考えをより正確に相手に伝えることのできる機会が増えてきた。 ○ビブリオバトル等で、表現する力、読書への意欲も高まっており、読書量も増えてきている。	評価
	定期テスト、単元テストなどによる状況(各教科)	○概ね、どの学年教科においても学力はついてきていると思われるが、算教科においては計算間違い、国語科においては漢字の筆順の間違いが散見される。形の似た字と間違えやすい。	○漢字や計算等の基礎学力の向上 ○文章問題などの文章を読む力の向上	○テスト後には、誤答を解説して直しをさせることで児童一人一人が自分の間違いを認識し、次の機会の誤答を減らすことができるようにする	○宿題プリントやアプリの活用により、基礎的・基本的な計算や漢字の学習をする機会を多く設定することができた。 ○ICTを活用した反復練習を取り入れることで、楽しみながら漢字・計算の練習に取り組むことができています。	B
	授業等からうかがえる状況(各教科)	○ノート指導については授業中だけでなく、後の学習に役立てられるようなノートづくりのできる児童が増えてきた。 ○学年の発達段階に応じた発表の仕方、話し方を指導し、進んで発表しようとする児童が増えてきた。 ○学習発表会では、わかりやすい掲示物の工夫やパワーポイントを使った発表等、様々な表現の工夫が見られた。 ○国語科の書くこと、聞くことと関連づけた指導を行う必要がある。	○各教科・領域の中で関心・話し方・書く力の育成	○自分の考えをノートにまとめることができる ○場や目的に応じた話し方や言葉を選んで発表することができる ○各教科・領域の学習において児童がすすんで関わり合う機会を多くもつようにする	○国語科を中心に、大事なことを聞き落とさず、工夫してメモを取ったり、互いの立場や意図をはっきりさせながら、計画的に話し合う学習活動を取り入れたりして、聞く力・話す力をつけていく。 ○各教科の学習で、学年の発達段階に応じた発表の仕方、話し方を指導する。 ○各教科の学習で、適切な言葉の使い方を指導していく。 ○児童が進んで学習したくなる授業、学習したことを話したくなる授業の研究をし工夫する	○きめ細かに様子を把握して、指導している中でも「自分の考えをもつこと」「文章にあらわすこと」が難しい児童も見受けられる。 ○各教科・領域で振り返りや感想などを書く時間を意識して設けることで、考えを整理する時間ができた。 ○グループでの活動を多く取り入れ、自分の考えを発表する場が確保されている。役割をもたせることで、すすんで関わり合いをもつようになっている。
学力生活向上に慣れる等の学習習慣	○学校評価などのアンケート調査やこれまでの全国学力・学習状況調査の質問紙の経年変化による児童・生徒の状況 ○夏休み、冬休みには、生活リズムカードを実施した。家庭の協力を得て生活の振り返りをするだけでなく、家庭での実践を促すことができた。 ○養護教諭や実業教諭による保健指導、栄養指導で、健康・安全に気をつけて生活しようとする児童が増えてきている。 ○宿題については、ほぼ全児童が家庭で実施できている。 ○児童アンケートでは「自分から進んで学習する」が約80%だったが、保護者アンケートでは、「家庭で学習する習慣が身に付いてきた」割合が約70%で、まだまだ十分とはいえない。自主学習できるように、家庭と連携して取り組んでいくことが課題である。	○基本的な生活習慣の確立	○「自分の意見や考え」を自信をもって話すことのできる児童を増やすこと ○生活面・学習面でのきめ細やかな支援・指導で、「自分いいうところがある」と自信をもって言うことのできる児童を増やす ○家庭学習の手引きを活用して家庭での学習をすすめていくことのできる児童を増やす	○学校全体で「やさしさの花」として他学年や同じ学年の友だちのやさしさを感じたところを、一人一冊書いて、年間を通して定期的に取り組み、互いのよさについて気づかせていく。 ○長期休みには「生活リズムカード」を活用し、規則正しい生活を送ることができるようになっている。 ○学校全体で「やさしさの花」として他学年や同じ学年の友だちのやさしさを感じたところを、一人一冊書いて、年間を通して定期的に取り組み、互いのよさについて気づかせていく。 ○長期休みには「生活リズムカード」を活用し、規則正しい生活を送ることができるようになっている。	○困り感のある児童に対して、教師が関わり方を示すことで、周りの子の言葉がけ、支えから自分のがんばりに気づくことのできている姿が見られてきた。 ○子ども達のがんばったときにそれを自分たちで認めることができるよう教師が声掛けをおこなってきた。 ○家庭学習の手引きはなかなか家庭にも子ども達にも浸透しにくい現状がある。今年度は拡大したものを掲示するなど啓発につとめてきた。来年度も引き続き、児童・保護者への啓発と家庭学習への意識付けをしていかなければならない。	A
校内研究・研修の状況	校内研究の状況	○全教員が各教科・領域において授業実践に取り組んだ。 ○全教員がICT機器を活用した授業を行い、指導力の向上に努めるとともに、ICT機器を活用することで、子どもたちの思考が深まる授業を作り出した。 ○学習において、ICT機器を活用することをきっかけにさらに思考が深まり、互いにつながりやすくなった。 ○保健教育事務所より情報教育専門推進委員を講師として派遣してもらい、ICT機器の活用に向けた基本的な操作方法や活用のアイデアについて研修した。	○研究推進委員会を中心に、児童の発達段階を見通したノートの使い方、教室掲示等の言語環境の整備を進める。 ○教師は、タブレットや電子黒板等情報機器を活用し、少人数であることを活かした多様な学び、効果的な学びを図れるように、情報活用能力の育成に努める。	○全教員が各教科・領域において授業実践に取り組む。 ○全教員1回以上の研究授業を実施し、指導力の向上に努める。 ○ICT機器を活用した「子どもたちのつながりを大切にしたい授業づくり」を考える	○ICTを活用し、授業中に即振り返りを共有することができ、子どもたちのつながりのある授業づくりができた。 ○ICTの活用やプログラミングを意識した授業実践を行うことができた。	A
	校内研修の状況	○放課後子ども教室が、毎週金曜日に開催されており参加児童も多い。ここの学習が基礎学力の定着に役立っている。 ○家同士が遠く、遊びが制限されることもあり、学校でのイベントに多く参加している。	○ICT機器の活用に向けた基本的な操作方法や活用のアイデアについて研修する。 ○プログラミング教育を積極的に展開する。	○全教員が各教科・領域において授業実践に取り組む。 ○全教員1回以上の研究授業を実施し、指導力の向上に努める。 ○ICT機器を活用した「子どもたちのつながりを大切にしたい授業づくり」を考える	○校内研修会でICTの活用について話し合う機会を多く持つことができた。 ○研究推進の一環としてプログラミング教育を積極的に進め、その在り方や学校としての方向性について議論することができた。	A
家庭・校種間連携	家庭・地域等の状況	○放課後子ども教室が、毎週金曜日に開催されており参加児童も多い。ここの学習が基礎学力の定着に役立っている。 ○家同士が遠く、遊びが制限されることもあり、学校でのイベントに多く参加している。	○基礎学力の向上 ○家庭学習の習慣の定着	○放課後子ども教室の現参加者の維持	○現状では、授業参観や学級懇談会、オープンスクールを実施することはできないが、学校だよりや研究通信などを通じて、子どもたちの学習の様子や学校での取り組みについて情報発信をしてきた。来年度も、社会の情勢に合わせた形で子どもたちの学びやがんばりを様々な方法で発信していきたい。	B
	小・中における教科連携等の状況	○R3年度は自然学校も、母子小・小野小・本校が合同で実施し、上野台中学校区との連携を充実させている。 ○教科力強化された外国語科において今後中学校だけでなく、上野台中学校区でも連携を図り、指導内容や授業の工夫・改善等を行っている。	○上野台中学校区との4校交流を実施する ○中学校との連携を図っていく	○児童・生徒の様子を交流し、校区の状況を把握するとともに児童生徒理解に努める。 ○6年生を中心の、児童の課題や実態について中学校と交流の場をもつ ○小中学校で共通の目標をもって教育活動に取り組む ○みんなで育てよう～上野台中学校区での協働～の取り組みを定着させていく	○高学年を中心に、宿泊行事をメインとして中学校区での交流を図ってきた。	B